

ヒマラヤ

No. 114

● 特集 — インド・ヒマラヤ1979年の記録



1981 MAY

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

昭和56年度日本ヒマラヤ協会通常総会

このことにつきまして、定款の定めるところにより下記のとおり開催いたします。

御承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員各位には万障お繰り合わせのうえ出席されますようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、同封しました委任状を必ず提出されるようお願いいたします。会場準備等の都合上、出欠については同封ハガキにより5月10日までにお知らせください。

記

1. 日 時 昭和56年5月17日(日) 午後1時
2. 場 所 アジア会館(東京都港区赤坂8-10-32 電話03-402-6111、地下鉄銀座線青山1丁目駅下車、カナダ大使館のヴィザ・セクションの近く。)

3. 議 事

- 1) 議案第1号 昭和55年度事業報告について
- 2) 議案第2号 昭和55年度収支決算について
- 3) 議案第3号 昭和56年度事業計画について
- 4) 議案第4号 昭和56年度収支予算について
- 5) 議案第5号 定款の一部変更について
- 6) 議案第6号 役員の改選について

4. その他

※総会終了後、同会場において次の講演とスライド上映を行いますので引続き御参加ください。

○講師 中垣淑子氏(HAJ会員、1975年78年にインド・ザンスカール地域を踏査、報告書2冊刊行)

○テーマ 「ザンスカールの人と自然」

なお、会場にて「ザンスカール山群中央部踏査報告」の特別頒布を行います。(別項「書評」欄参照)。

表 紙 写 真

西北ネパールのロギン村でのことである。道が2つに分かれているので、どうしたものかと考えあぐねていると、10分ぐらいのうちに、これだけ人が集まってきた。ネパール語会話の本を開いて「クン パートー ラムロホ?」と声を張り上げているのが、私の相棒である。彼らは好奇心がつよく、また親切だった。
写真: 細貝 栄

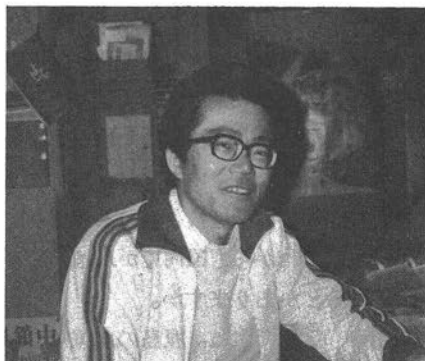
ヒマラヤ No.114

- | | | |
|-----|------------------------|--------------------------------|
| 1. | ヒマラヤ放談 | 近 藤 和 美 |
| 4. | ヒマラヤニュース<インフォメーション・新刊> | |
| 6. | カンチ通信 No.2 | |
| 8. | 特 集 | インド・ヒマラヤの記録 稲 田 定 重 |
| 13. | 連 載 | ヒマラヤの報告書紹介② |
| 14. | | ヒマラヤ閑話⑨ 水 野 勉 |
| 16. | | トレッキング許可で登れる山⑧<メラ・ピーク> 藤 原 一 孝 |
| 19. | カンチェンジュンガ学術調査について | 五百沢 智 也 |
| 20. | 追 悼 | 野中和雄氏 |

ヒマラヤ放談

近藤和美

近年、ヒマラヤでの交差縦走や冬期登山が行われてきている。今回はそのパイオニアともいえるべき、近藤和美氏にお話を伺った。また、氏は「山と仲間」の編集者でもある。その登山観の柔軟さは、編集という職業柄からくるのか、それとも柔軟だから編集ができるのだろうか。それについて、したたかな視点を持っている方である。



●ヒマラヤの交差縦走そして冬期登山

—— 76年ですね、インドヒマラヤの交差縦走を果たしたのは。

近藤 はい、そうです。

—— あの記録をみて、僕なんかショックを受けたんですが、ヒマラヤでの交差縦走なんて初めての快挙ですよ。

近藤 快挙なんていえるかどうか(笑)。以前からそんなアイデアはあったようですが、成功したのは僕らが初めてのようです。

—— そんな発想と実践が結びつくというところが興味深いのですが。

近藤 僕なんか特殊なのかもしれないけど、こういうことをやれば受けるという頭がないんですね。登山界のトップを走る力もないことは心得ているから、自分なりにできることをやっていきたい。それは国内でも海外でも同じ姿勢で行きたいと思いますね。アルパインスタイルだ、無酸素だ、冬期だ、いろいろなやり方がありますが、それでなくちゃならないとは思ってない。ただ一味違ったこと、そういう考えは常にありますね。できないのはべつとして、人とまるっきり同じことはやりたくないという願望はもっています。自分なりにちょっと薬味をきかしたこと、といっても他人指向とは全然違うんですけど、自分が楽しければそれでいいということでやっていますね。

—— 交差縦走のときもそうだったんですか？

近藤 あのとときは7,000mを越えた山を未登ルートから登りたいというので、ドゥナギリの北稜に申請したんですよ。ところがJAC学生部が先に許可とっちゃった。IMFから、代わりにマイクトリではどうかときたわけですよ。それでマイクトリを調べたら全然ダンゴ山なんで僕の指向からいくと合わない。でもその年を逃すと行けなくなる隊員もいたんで、何かおもしろいこと、変わったことをやれないかなあということで、デヴトリとの交差縦走を思いついた訳です。

—— そして80年にはインドヒマラヤの冬期登山ですよ。インドヒマラヤでの冬期登山も初めてだったと思いますが？

近藤 ないんじゃないですか。ただ前に北大隊がトリスルに行こうとしていましたね。でもリシガンガの方は夏でも険しいところで、冬は雪がついちゃってアプローチでだめだったようです。

—— 冬のインドの雪はどうですか？

近藤 ネパールの冬の山を経験してないので、詳しいことは言えませんが、大ヒマラヤ、カカラムを含めて、西に行くほど冬の降雪量が多いといわれますね。だからインドは冬のネパールとは違った難しさがあると思います。ガルワールも2～3月はかなり降りますよ。去年の例でいうと、2,200m位からは数十センチ積りますからねえ。ポーターは雪の装備を持ってないし、キャラバンルート中にも雪崩の危険があって、そんな点でも難しいですね。

—— そうですか。それから近藤さんの国内の登山活動にも関心があるんですけど、例えば上越の荒沢岳の冬の登攀ですよ。あの頃みんな谷川岳のルンゼに集中しているのに、あんなところに行つてすごい登攀を続々とやっている。

近藤 自分の中では未知の要素ってのは、おもしろいというか、楽しいですよ。あそこには2〜3年、冬に十数回通いましたけど、自分としては良い思い出になっていますね。特にダイレクト・スラブは最後まで抵抗されましたし。

—— これからも国内でがんばってやってみようところとかありますか。

近藤 そうですね。鹿島の北壁でちょっと考えていることがあって、つい最近も行ってきたんですよ。僕の場合、2色の登山がありますね。ひとつは重箱の隅をほじくようなものになるかもしれないけど、まあ人の手に触れられていないところ。もうひとつは、スケールの大きな山行というのかな、例えば後立山から黒部を越えて剣に行くとか、あるいは縦走しながら壁から壁へとかね。だから最近ブームになっている屏風を継続して北鎌を下るといった発想は、僕はずいぶん昔からもっていた。

—— うーん、なるほどねえ。いわゆるヒマラヤニストというのは、国内の山をゲレンデ視がちですけど、近藤さんの場合は違うんですねえ。

近藤さんの山は、わりと地味な方なんですけど、何か光るというか、視点がはっきりしているように思うんですよ。それがヒマラヤでも発揮されている。ヒマラヤも国内の延長という傾向がありますね。

近藤 あるんじゃないですかね。まあ、どちらも楽しく、一味違うことをやりたいというか(笑)

—— 今、ヒマラヤでも8,000m峰のバリエーションとか、無酸素、冬期と、どんどん行われていて、これからも続くと思いますし、国内でも人間の肉体的な限界に挑むような登攀が行われていますが……。

近藤 やはり必然だろうし、やれる人は大いにやってもらった方がいいと思う。ただ山をやる人ぜんぶがそれをできるわけじゃない。それぞれの人が自分で楽しめる山をやればよいと思うんで、

ああいうやり方はドロ臭いとか、時代遅れだという批判は、おせっかいだという気がしますね。

●インドヒマラヤの魅力

—— やはりインドヒマラヤにひかれますか？

近藤 とくにインドにこだわっている訳ではないですね。再度ヨーロッパアルプスに行つて壁を登ってみたいし、条件がそろえばアンデスにも行きたい。ネパールはトレッキングでしか入っていないから、やはり登ってみたいですね。

—— でも2回とも遠征はインドですね。

近藤 初めてヒマラヤに行ったときは、ネパールは登山隊を入れてくれなかったんでインドに行きました。2度めは、計画当初は、ネパールのクスム・カングルー(当時未登)ということで出発しましたが、まもなく佐久アッセント・クラブがパンワリ・ドワールに敗退したことを知って、それでは、かつてが分っているインドに行こうとなったわけです。ほんとと同じところばかり行くのは好きでないんですが、2回ともナンダデビのそばに行ったから、今度もまた行けたらナンダデビそのものを登ってみたいという気はありますね。

—— 分かる気がしますねえ。他の山域にもどんどん行きたいんだけど、何ヶ月間も悪戦苦闘した山の近くにまた行つてみたくなるというのは……。つきあいのあった村人なんか恋しくなるし。

近藤 ありますね。今回もビンダリにのべ5ヶ月くらい滞在して、最奥の部落にカティというところがあるんですよ。そこの人達と、いろんな意味で親しくなり、またずるがしこさも見てきたんですが、やはりもう一度彼らに会いに行きたいと思いますね。

でもやっぱり僕は登り屋なのかな。そうした人達とのふれあいもいいんだが、それよりも山に魅力がありますね。登る方、あるいは見る方に主眼がいつちやう。

—— あくまでも現役なんですね(笑)すると今度の予定も。

近藤 まだ具体的には何も決まっていんですが、願望としてはさっきもいったようにナンダデビに行きたいですね。でもあの山は、申請がおそらく何年分も山積みされているだろうから、行っ

てみたいだけでは、どんどん先にのびてしまうでしょう。やるとしたら、やはり登られてないルートからの方がおもしろいでしょうね。

●「山と仲間」と労山

——「山と仲間」の編集にたずさわるようになったきっかけは？

近藤 ヒマラヤに行くには、前の会社をやめざるを得なかったんですね。その頃、山と仲間の方も人手不足ということもあって、やってみないかといわれてやることになったんです。前から編集には興味が少しあったし、やってみたら割と異和感がなくてできたわけです。ただ、人にはそれぞれ得手、不得手がありますから、スタッフが大勢いればいいんだけど、大勢いないから辛いところですよ(笑)。

——編集って、デスクワークとしても大変なんでしょうが、また登山界の流れを左右するというのは大げさかもしれませんが、そんな責任みたいなものがかかってくるわけでしょう？

近藤 山と仲間の編集者でいえば、そういった面での社会的意識を常にみがおかなければいけないですね。今のところ登山界を引っばっていくというような考えも力量の蓄積もないんですが、ただ、難しいことですけど、登山倫理を正していくというか、そういった面では僕らにできることがあればやっていきたいですね。

——どんな特色を出していきたいですか？

近藤 登山をやっていく上で、いろいろな制約がありますね。登山者が置かれている社会的、経済的立場とか、それをいかに切り開いていったらいいのか、そうした面で山と仲間がリーダーシップを発揮していかなければならないんじゃないかと思うんですよ。まあ、あの雑誌は労山関係の機関誌でもあるわけですが、半数以上は労山関係以外の読者の方です。だから労山の運動の理念というのかな、それをナマの形でなく、労山の考えを理解してもらえるような内容にしたいと、心がけながらやっています。なかなか難しいんですが。

——労山ができてからどのくらいになりますか。

近藤 発足したのが60年ですから、21年目で

すか。

——組織が大きくなると運営も大変になってくけど、大きな組織でないとできないこともあるでしょうね。

近藤 そうですね。やっぱり、自分は山へ登ることだけを追求していれば事足りるんだ、という考えていると、そのうち山に登るフィールドもなくなってくるんじゃないかな。やれ登山条例だ、運賃値上げだ、山に道路はできてくる、ゴミが多いとか、いろいろ登山者にとって不都合なことが起ってくる。やはり、登山、あるいは人の行為というものは、政治、経済、社会といったあらゆるものから切り離しては考えられないと思いますね。最近の鷹取やローカル線廃止の問題もそうですね。

——個人の力だけじゃ限界があるということですね。

近藤 登山者が好きなことができるような状態が望ましいわけで、今からそういう志をもっている仲間を増していくしかないだろうと思いますね。遭難対策にしても、ヘリコプター持つには数がいなくて難しい。フランス山岳会など会費が有効に使われていますよ。ヘリは飛んでくれるし、会員であれば、山小屋などもベラボーに安い(笑)。そういうのを実際に見聞してくると、やはり日本の登山界もそうなるべきじゃないかと思えてくるわけです。

——労山の課題、これからやるべきことは、そういうことですか。

近藤 そうですね。

——登山者はどうも横のつながりがうすいようですね。やたらとグループができて、そこに教祖が現れてみたり……(笑)。

近藤 それで権利の主張がされにくいんで、やっぱり登山界がもっと発言権がもてて、いい登山ができるような場を作っていかなければならないと思いますね。

——そうですね。様々な意味で登山者は謙虚に社会と登山との関係を考える必要があるでしょうね。そろそろ録音テープも尽きてきました。さて、本題に入りますか(笑)。今日はお忙しい中をありがとうございました。

(企画・構成 土居正勝)

インフォメーション

＜予 告＞

’81年H A Jセミナートレッキング

H A J 野外活動委員会

79年に実施して好評をへくしたセミナートレッキングを81年12月末～82年1月中旬にかけて行うべく目下準備をすすめています。

このトレッキングは、すぐれた講師のもとにヒマラヤの自然や人について勉強しようというもので、対象とする地域もユニークなところを選定いたします。

現在のところ、ネパール・ヒマラヤのロールワリン山群周辺を予定していますが、高年令の方から若い人までそれぞれの体力、志向、経験に応じて充分満足できるものと考えています。

4月に現地調査を行う予定ですのでくわしくは「ヒマラヤ6月号」に発表します。期間は12月27日(日)から1月16日(土)までの21日間を考えています。

関心をお持ちの方は今から予定をとっておいて下さい。

ヒマラヤの王国——ネパール展

——日・ネ国際親善隊の記録——

主催 日本山岳会東海支部

後援 愛知県、名古屋市、朝日新聞、名古屋テレビ、他

期間 昭和56年5月15日～18日 10時～19時

場所 名古屋駅前「名鉄百貨店催事場」

入場無料

概要 1980年秋のネパール・ヒマラヤ ガウリサンカル峰登山の記録 架橋や教育援助など、親善活動の記録。ネパールの民芸品の展示。ヒマラヤなんでも相談コーナーの開設。ヒマラヤに関する本の即売。期間中、アンケートによる記念品の贈呈(ネパールの土で焼いた菜ワンなどもある)。

国際見本市にネパール王国参加

4月28日(火)から5月7日(木)にかけて、東京晴海にて第14回東京国際見本市が開かれる。これは(社)東京国際見本市協会の主催によるもので、世界各国から生産、技術、消費、生活など様々な分野から物品が提供される。ネパール王国からも Indra Bahadur Sakya氏他1名が派遣され、「消費生活関連分野」のコーナーに出品が予定されている。

問合せは下記へ。

記録の公表・命名は慎重に

最近、80年インド・ヒマラヤに登山したある隊の報告書を送ってもらった。

彼らは、ヒマチャル・プラディシュの一つの山に登頂し、初登頂としてこれに命名し、IMFに届け出、帰国して報告書にまとめ発表している。

表紙に出ている登頂ピークをどこかで見たように思い文献をあたってみたところ、ヒマラヤン・ジャーナル1962～63に出ていた。1960年9月にドイツ隊が登頂した記録である。

たしかにこの地域の地図はまだ不正確な点があり、山名の同定も充分でない。

このピークもたまたま写真が出ていたからわかったわけで、日本隊が登った山とドイツ隊が登った山は山名(ピークナンバー)が異なって発表されている。写真がなかったら幻の初登頂となり、そして、幻の山がひとつ誕生するところであった。登山史に混乱をもたすわけである。

このような事例はこれまでも幾つか見受けられている。

現地に行く前に目標の山の登山・踏査史を可能な限り調べあげ、帰国してからは得られた写真を武器に徹底的な同定を試みるべきである。出発前にもう少し研究されていたならと悔まれる。初登

頂をめざし精一杯がんばり、その頂に立った彼らこそ痛恨の極みであろう。

山名を命名するとなればより慎重でなければならない。調査のうへミスと判明すれば直ちに取り消しの手続きがとられることは当然である。命名は、初登頂者にのみ許されると解釈すべきである。更にいうならば、初登頂者といえどもその地に住む人々に徹底してあたり、無名であることを確認した上で、地域の人々が納得するであろう命名がなさなければならない。

ヒマラヤの各地にいわゆる文明国の横暴というか、ひとりよがりの吐気を催すような命名がなされていることは全くの冒とくである。許されない行為である。

我国の隊でも、スポンサーの政治屋のボスの名をつけたり、クラブ名を冠したり、日本の地名をつけたりという事例がある。一切排されるべきである。(い)

図書斡旋のお知らせ

下記の図書の頒布を依頼されています。定期購読を希望される方はH A J事務局まで申しこんでください。到着次第事務局から発送します。

○ Indian Mountaineer

I M F (インド登山財団) 機関誌、年2回発行、年間4,500円(送料共)

インド・ヒマラヤに関する登山記録の公式発表のほか、ネパール、カラコルムでの登山記録、インド登山界の動向等。

○ Himavanta

インドで発行されている月刊登山誌。年間購読料3,000円。

インド・ヒマラヤを中心とする登山、トレッキングその他の記事。

新刊図書一覧

- ①田村隆一、「インド酔夢行」、集英社、1981・2、214p、240円、(「集英社文庫」121A。1976年日本交通交社出版事業部版の文庫版)。
- ②岡本幸治、「菩提樹の下で——釈迦——」、日本教文社、1981・2、173p、880円、(「聖者物

語」・1)。

- ③石川文洋、「アンコール・ワット——遺跡と民衆——石川文洋写真集」、朝日ソノラマ、1981・2、132p、3,000円。

- ④A・B・エル・セバイ著、「イスラームと日本人——激動する世界の中で——」、潮文社、1981・3、283p、980円。

- ⑤小倉董子、「女性登山教室」、成美堂出版、1981・3、215p、900円。

- ⑥中河与一、「海の旅・山の旅」、玉川大学出版局、1981・3、284p、1,200円。

- ⑦中東調査会・編、「中東と超大国——80年代・激動の中東・米ソ、そして日本——」、産業能率短大、1981・1、354p、2,500円。

- ⑧杉山二郎、「オリエント考古美術誌——中東文化と日本——」、日本放送出版協会、1981・3、254p、750円、(NHKブックス386)。

- ⑨NHK取材班・司馬遼太郎、「民族の十字路口——イリ・カシュガル——」、日本放送出版協会、1981・3、271p、1,700円、(「絲綢之路・第六巻」)。

- ⑩フジテレビ特別取材班・宇留田俊夫・南川泰三、「野人は生きている——中国最後の秘境より——」、サンケイ出版、1981・3、238p、880円。

中国語版図書

- ①欧陽覺亜・郑貽青／編著、「黎語簡志」、北京・中国、民族出版社、1980・12、137p、0.46元＝280円、(初版3,500部。《国家民委民族問題五科叢書》之一、中国少数民族語言簡志叢書)。
- ②梁敏・編著、「毛難語簡志」、北京・中国、民族出版社、1980・12、110p、0.38元＝230円、(初版3,500部。叢書名等同上)。
- ③王均・郑国乔／編著、「仫佬語簡志」、北京・中国、民族出版社、1980・11、119p、0.40元＝240円、(初版3,500部。同上)。
- ④張均如・編著、「水語簡志」、北京・民族出版社、1980・11、109p、0.38元＝230円、(初版3,500部。同上)。

——資料・藤井 毅——

カンチ通信 No 2

大変多くの皆様にお世話になりました。H A J のカンチェンジュンガ遠征隊の報告をお届け致します。今後10日に一度位いの割で行なう予定です。当初予定しておりました陣容とは多少の変更がありました。登山隊は、本部要員4名、登攀要員18名、リエゾンオフィサー1名、ハイアルチュードポーター16名、サードー2名、ベースキャンプ要員5名の合計46名となりました。

今回の当初計画では、カンチェンジュンガ南峰から中央峰を越えて主峰に至る縦走登山でありましたが、既報（ヒマラヤ111号）のとおりに、縦走ラインを、ヤルンカン（カンチ西峰）から主峰へと変更して実施する計画となっています。ちなみに我々本隊がカトマンズを離れた2月25日現在でも、南峰、中央峰はオープンされていませんでした。カンチェンジュンガの南西面からの登山を予定している今回の計画では、ベースキャンプに到着するためにヤルン氷河上に2つのキャンプを設けなければならず、このヤルン氷河上のルートは、標高4,500mから5,500mの完全な雪の世界となっているため一般のローカルポーターは、入れません。このような特殊環境のため約700人のポーターを一度にスタートさせることは得策ではないため、隊を二分し、完全に独立した先発隊（隊員7名、現地要員9名、ローカルポーター200名）を派遣し、氷河上のルート確保と上部登山の基地となるアドバンス、ベースキャンプ設営の役割を果してもらうことになりました。先発隊は菊地副隊長をリーダーに渡辺、山田、藤倉、若尾、片岡、鈴木茂の各隊員の計7名が2月16日イラムからキャラバンスタートしました。現在のところ、先発隊との連絡はとれていないのでその後の様子は判かりません。

本隊は、カルカッタからビラトナガルに輸送された隊荷の整理、現地購入作業等とカトマンズ渉外の二班に分かれて隊務を処理し2月25日、ダーランバザールにて合流し翌日26日には約500名の隊としてキャラバンをスタートさせました。

初日の荷物の分配とアドバンスマネーの支払は

約5時間を要し、最後のポーターが幕営地に着いたのは夜の9時を廻っていました。

キャラバンルートは、昨年偵察隊と同じですからほとんど問題ないのですが、季節が約3週間早いと大部隊のためタブレジュンまでは10日間ほどかかりそうです。

本日で4日間のキャラバンを終えましたが、早速ポーター達の騒ぎが始まりました。ベースキャンプへ着くまでこの繰り返して頭の痛いところです。

隊員は皆元気です。乾燥し切った世界ですので風邪や喉の病気になりやすいので、心配していますが、道々にあるパティ（小さな食堂）に入り込んでは、チャン、トンパ、ロキシー等の地酒や現地食に舌づつみを打っているようです。

ポーターの騒ぎで明日のスタートは一波乱あるかも知れません。標高も2,000mを超えると夜は羽毛服が欲しい位に冷え込みます。簡単ですがとり急ぎ第1報とします。

高原の分岐路チトレより

（1981.3.1 山森・記）

3月2日 キャラバン5日目は、隊員の足で30分歩いた。「トゥッテイ」と云う場所でポーターがストップ。結局ここまで5日分、これから先5日でタブレジュン着と云うことで妥結し早速支払いを開始したが6時半過ぎ酔ったポーターが支払い場所へククリ（山刀）で切り付けると云う事態になったため中止。ネパール通の何人かの隊員でさえ、このようなポーターの振舞いは考えられない!!とのことでした。

3月3日 昨夜騒いだポーターは解雇。予想通りこれら何人かのポーターが暴れ出しとうとうシェルバに撲られて鼻血を出してしまいました。更には、このポーターが追いかけて来てシェルバや隊員を待伏せしているとの情報で皆、離れずに歩くことになりました。

キャラバン道は偵察の時と少し違い、チトレか

ら尾根道に行くものです。最高所で約2,900mとなり日本のこの季節では完全な冬山ですが、こちらでは花が咲いています。とは云っても朝夕は冷え込みが厳しく風邪等に罹り易い状況です。

3月4日 朝の交信でヤルン氷河の先発隊と連絡がとれました。それによりますと先発隊は2月16日イラムからキャラバンを開始し2月28日には、ヤルン氷河の舌端の上部にあるラムゼー(4,300m)に到着。これからヤルン氷河上に2つのキャンプを建設してベースキャンプ入りをする予定とのことです。

3月5日 タブレジュンでの食糧購入とポーター入れ替えのため角田隊員とシェルパを先行させました。尾根道のためキャラバンの間隔は短かく、隊員達も比較的のんびりしています。しかし、約450個の荷ともなりますと、毎日その到着の確認作業だけでも大変です。まして、皆が固まって来るのではなく、先頭から最後まで約5時間位いの差があります。

3月6日 標高630mのドバンに降りました。さすがに暑く、隊員達は早速洗濯や久し振りに身体を洗ったりしました。ここは、カンチェンジュンガ北面との別れ道です。

さて、キャラバン中の隊員の役割は、キャンプ地を決める者、キャラバン食糧、装備、輸送の各担当者が先発。中発に輸送と偵察時にこのルートを熟知している者。最後方にトラブルを解決するための要員。と3つに分かれて歩いています。それぞれを3人の登攀リーダーが責任を持って処理しトランシーバーでの連絡により常時進行状況を把握しています。このため先発の隊員は早ければ11時頃キャンプサイト着。最後方は、18時頃にやっと到着すると云う毎日が繰り返される訳です。

3月7日 タブレジュンに着きました。11時から支払いを開始して終了したのは15時です。支払の日は、この準備のため毎回大変です。

今日は土曜日です。ネパールは土曜日が休日の

ため、このタブレジュンでもバザールが開かれました。美しく着飾った娘達が大勢いると云うので隊員達は見学に出かけ、しこたまロキシーを飲んで帰って来ました。

3月8日 約150名のポーターを入れ替えて出発しました。先発隊と連絡がとれて、夜はトランシーバーを通してヤルン氷河上のキャンプにいる彼等と約2時間の歌合戦です。先発隊は猛者勢いですが現在、菊地副隊長の下にチームを2つに分けL.山田、若尾、鈴木、L.藤倉、渡辺、片岡で行動しています。3月10日には全員氷河上の2つ目のキャンプ(通称トランスポートキャンプ)に入る予定です。

3月9日 朝から賃金の件でポーターストライキです。騒ぐポーターを見つけ、すぐに解雇しました。大体のポーターは大人しいのですが一部にアジるのがいます。角田隊員をヤンボディンに先行させました。ポーターアレンジのためです。

3月10日 最奥の部落ヤンボディンの1日手前まで来ました。先発隊とは連絡がとれません。明日はラムゼーまで入るポーターが何人集まるか?心配です。この遠征の第一関門でもあります。

ママンケにて(山森・記)

●訂正とおわび

「ヒマラヤ」113号に、以下の誤りがありました。関係者にご迷惑をおかけしましたことをおわびし訂正いたします。

1. P21 右の上から15行め、「長野労働山」は「無所属」の誤りです。

藤江 幾太郎 —ネパール収集品とスケッチ展—

と き 5月11日(月) ~15日(金)
午前9:30~17:00(最終14:00)

ところ 丸の内三菱231(三菱商事別館1F)
丸ビル西隣 TEL 210・2527

※ 昨年訪ネの際収集したマスク師(前ネパール美術協会会長)の水彩、素描等、計30数点展示

インド・ヒマラヤ1979年の記録— 1

稲田 定重

少し遅れたが、79年におけるインド・ヒマラヤの記録を紹介する。この年は、ガ
ンゴトリ地域のオープンにあって、IMFに登録された隊は、外国隊54、インド隊
60、計114隊を数えた。外国隊のうち日本隊は16隊である。ここでは、インド隊、
外国隊の順に2回にわたり紹介する。

資料は下記を用いたが、記録不詳のものが幾つか
ある。

Indian Mountaineer = IMF

Himavanta = Culcutta

American Alpine Journal = AAC

Alpine Journal = AC

記載順序

- ① 国名・隊名（インド隊は国名省略）
- ② 隊長名と隊員数（隊長を含めて）
- ③ 記事
- ④ 引用資料名

ガルワール・ヒマラヤ

1. Koteswar (6,035m)

- ① Gujaratの女性隊 ② Miss Urvashi Jagirdar
7名 ③ 当初Bharte Knunta (6,578m) をめざし
たが転進した。登頂成功、記録不詳、8月～9月
④ I.M-Na 4

2. Kedarnath (6,940m)

- ① インド陸軍隊 ② Maj. S. S. Kahlon 16名
③ Tapobanから1 km上にBC (4,815m)、C1
(5,029m)、C2 (5,242m)、C3 (6,248m)、C4
(6,400m)と設置。5月26日猛烈なブリザードに
おそわれ、3つの前進キャンプがナダレにさらさ
れた。C2では多量の装備が失われ、C4は壊滅
状態となった。C4から撤退途中にHave Janak
Rajが死亡、ヘリで遺体を収容。体制をたて直し、
アタックキャンプを6,400mに設置したが6名が
6月6日に6,797mを最高到達点として断念。
④ I.M-Na 4

3. Devistan (6,678m)

- ① Pune ② Vijay P. Paranjpye 8名
③ C3 (6,096m)を6月14日設置し、アタックを

かけたが濃いガスのため頂稜の6,400mで断念し
た。なお、近くの5,943m峰に6月8日、7名が
登頂し、“Bharonitoli”と命名した。④ I.M-Na 4

4. Nirgiri Parbat (6,481m)

- ① Himachakra. Hooghly ② Gopal Chandra
Nag 11名 ③ Bhindarの麓にBC (4,114m)、A
BCをChakultalaの4,572m、C1をKhulia Garbia
氷河のアイスフォール近く(5,181m)に設けた。し
かし、連続する降雪とナダレのためC3を設置で
きず、5,730mで撤退した。④ I.M-Na 5

5. Mangraon (6,567m)

- ① Girivihar, Bombay ② Mahesh Desai 10名
(HMIとNIMのインストラクター2名を含む)
③ BCをHAAJ Kund (4,267m)に置いた。A
BCはMangraonとDeo Damlaからの氷河出合付
近く(5,029m)に、C1をBamchuからの南稜に
設置。Jimmyら3名がMangraon登頂を試みたが
雪の状況悪く失敗した。一行はこのあと北内院の
写真撮影を行なった。④ I.M-Na 5

6. Kamet (7,756m)

- ① Rajput第7ライフル連隊 ② Maj. Partap
Singh 19名 ③ ライカナ氷河のモレーン上にBC

を設置(5月12日)、その後悪天が続き、90～100kmにも達する強風にもおそわれた。漸く5月31日にC1を設け6月4日第1次アタックが出発、7,010mにC2、6月7日、Capt. R. Yadav ら7名がノーマルルートから登頂。6月9日には、Maj. P. Singhら9名が南東稜経由でアタック、7,620m付近で6名が高度障害でダウン、Singhら3名が登頂。

7. Deoban (6,855m)

- ① St. Stephen 大学ハイキングクラブ(デリー)
② Sanjiv Saith 9名 ③ 5月～6月、C1 (4,724m)、C2 (5,334m)、2名が凍傷と高度障害にやられた。また、コックが肺水腫になるなどがあり、加えて多量の降雪とナダレの危険のため断念。近くの無名峰(5,943m)にY. Zaheerら5名が登頂した。④ I.M-No 5

8. Kedarnath Dome (6,831m)

- ① Adventurers, Gauhati ② Pran Gopal Bhagawati 8名 ③ BCをTapobanに設置(9月29日)、ABCをKirti氷河の5,029m、C1を5,943m、C2を6,248mに設置した。
10月5日、メンバーのRohini Kumar、シェルバのNawan Thandup、Karmaが登頂した。しかし、帰路で悪天に見舞われ、C2へ下山途中でRohiniが死亡、遺体をヘリコプターで下ろそうとしたができず、氷の中に埋めた。④ I.M-No 5

9. Kedarnath Dome (6,831m)

- ① Metal & Steel Factory (Ordnance) Trekkers, Ishapore ② Amiya K. Ghosh 20名 ③ 9月4日、Dilip Bhattacharjeeら5名の隊員と2名のHAPが登頂した。④ I.M-No 5

10. Kedarnath Dome (6,831m)

- ① V.S. Mahajan, Pune ② V.S. Mahajan 7名
③ 5月31日BC設置(4,572m、Kirti氷河)、C1(5,181m)、C2(5,791m、Dome斜面)。6月7日に第1次アタックをかけたが悪天のため失敗、9日にV.S. Mahajanら3名が登頂した。
④ I.M-No 4

11. Kedarnath (6,940m)

- ① Eastern Railway Bharat Scouts & Guides, Howrah (Calcutta) ② Srikanta Mitra 12名
③ Bharte Khunta(6,578m)も狙っていたが、

Kedarnathのみ、9月6日、Amiya Mukherji と Pradip Karが登頂した。④ I.M-No 5

12. Swetban 氷河の無名峰

- ① Holiday Hikers Club, Bombay ② Viredra Pandit 5名 ③ 2名のHAPとガイド1名同行。
Swetban氷河の探査と無名峰(6,166m)の試登を目的としていた。(このピークは、1978年にカルカッタ隊が登っている)

1週間連続の悪天にあい食糧が不足した。

BCをRaktban氷河の4,262m、C1を5,242m、C2 5,486mと出したが、頂上直下の300mが難しくて断念した。

近くの無名峰(6,065m)に転進したが、これも頂上直下の15mが難しく失敗した。④ I.M-No 5

13. Sundar Bamakでの登攀

- ① Himalayan Lovers Association, Calcutta
② Pradipta Chakraborty 7名 ③ Sundar Bamakの探査を主目的に入域した。Chaturangi氷河に入り、Vasuki Lakeの南西にBC(5,029m)を設置(7月9日)。Vasuki氷河を横断し、5,791mのSundar BamakにC1を設け、Vasuki Parbatの6,248mに到達した。

14. Rudugaria (5,727m)

- ① A.V. Palande & Party, Pune ② Anand V. Palande 5名 ③ 10月11日Prakash B. Karye-karとDileep Nimbalkarが登頂。他のメンバーは高度障害で脱落した。④ I.M-No 5

15. Chiring We (6,559m)、Bamba Dhura (6,334m)、Kalabaland Dhura (6,105m)、Unnamed Peak (5,928m)

- ① Mountaineers Bombay ② Harish Kapadia 10名 ③ 目的をKalabaland氷河の探査と源頭の4座のピークの登頂においた。

Chiring Weは、6月10日にZ.S. Bogaら4名が登頂。ルートは、C3からChiring WeとBamba Dhuraとのコルに出て北面から西稜にとった。約450mのロープをフィックスしたが最終ピッチは60度の壁であった。(初登)

Bamba Dhura(第2登)は、6月5日にZ.S. Bogaら2名が登頂した。ルートは前記のコルから南東稜をとった。

Kalabaland Dhura(初登)には、6月6日、

H.Kapadiaら3名が登頂した。ピーク北面のゴルから急なガリーを突破している。

Unnamed Peak(第2登)は、6月9日、K.R.Bordiwalら2名がC2から登頂した。

報告書として、“The Mountain of Long Life”=“長命の山”(Chiring Weとは、長命の山の意。)が出ている。④I.M-Na4

16. Trisul-I(7,120m)

①NCC Girls' Expedition ②Col. Jagjit Singh 18名 ③Nb/Sub Cheringら7名がノーマルルートから登頂。1名が肺水腫にかかる。

前進キャンプ数3。④I.M-Na5

17. Sudarshan(6,507m)

①Himalayan Association, Calcutta

②Ujjawal Ganguly ③BCを4,481mに設けた。ルートが極めて困難で失敗した。8~10月

④I.M-Na5

18. Kamet(7,756m)、Abi Gamin(7,533m)

①Himalayan Enjoyers' Association, Chittaranjan ②Bijay Kumar Dutt 14名

③9月10日、BC設置(4,724m)、すぐ近くに、1978年遠征隊のK.C.Deyの墓があった。C1は東カメット氷河の対岸5,425m、C2は9月20日に設けた。しかし降雪と厳しい寒さの到来で行動を断念した。④I.M-Na6

19. Bharte Khunta(6,578m)

①Ladies Mountaineering & Trekking Club, Bombay ②Miss Sheila Mundke ③5~6月詳細不明、不成功 ④I.M-Na6

20. Rudugaira(5,727m)

①The Monters, Baroda ②Prafull Mistry

③9月~10月。Gangotri IIとIIIの登頂をめざしたが失敗し、近くのRudugairaに転進し登頂した。

④I.M-Na6

21. Jogin-I(6,465m)

①Students Gymkhana, I.I.T. Bombay

②V.V.Limaye ③Kedar氷河側から試みたが失敗、詳細不明 ④I.M-Na6

22. Unnamed Peak(4,876m)、Darwa(4,632m)

①Dr.G.R.Patwardhan, Pune ②Dr.G.R.Patwardhan ③Jalandri June谷の無名峰と

Darwaに登頂した。詳細不明 5~6月

④I.M-Na6

23. Unnamed Peak(6,393m)、Kalindi(6,102m)

①Eagle Trekkers, Pune ②Kamalakar Gane-sh Sambhus ③Kalindi Khal付近の無名峰とKalindi Peakをめざしたが成否等不明。5月~6月 ④I.M-Na6

24. Unnamed Peak(6,537m)

①I.I.T.Kanpur ②Dr.B.N.Banerjee

③5月~6月、詳細不明 ④I.M-Na6

25. Kalindi Peak(6,102m)

①The Explorers and Adventures, Bombay

②Miss K.Saraswathi ③Bhagirathi-III(6,358m)を目標としていたが転進してKalindi Peakに登頂した。④I.M-Na6

26. Sri Kailash(6,932m)

①Parvatarohi, Bombay ②Ranvir Singh

③8月~9月、不成功。詳細不明 ④I.M-Na6

27. Gangotri to Kalindi Khal

①Delhi Mountaineering Association

②Rajiv Lochan ③ガンゴトリからチャトランギ氷河に入り、源頭のKalindi Khalまでトレックした。6月。④I.M-Na6

28. Unnamed Peak(4,328m)

①University of Pune ②N.K.Mahajan

③4月~5月。Chandra Sheela(3,962m)からトレッキングし、4,328m峰に登る。詳細不明。

④I.M-Na6

Himachal Pradesh Himalaya

29. Hanuman Tibba(5,928m)、Friendship Peak(5,144m)

①St.Xavier's High School Social Society, Ahmedabad ②Fr. Erviti 26名 ③連日の降雪の中、BCをBeas Kundに設置。5月18日漸く好天となり登攀を開始したがナダレの危険があつてHanuman Tibbaを断念。

Friendship Peakに転進したがここもナダレの危険があり、C1を設けたのみで撤退した。

セント・ザビエル高は、20年来リーダーシップ

と社会奉仕の訓練のため野外活動をマナリ周辺で活発に行なっている。高所登山は今回が最初で、メンバーの大部分は雪の経験がなかった。

30. Kailash (5,655m)、Chokas Range (5,650m)

①陸軍通信隊 ②Maj. A.C. Roy 18名 ③9月22日に両峰に登頂。陸軍通信隊としては最初の遠征。Tangling ルートは、これまでの Dudh Khad ルートより難しい。④I.M-No 4

31. Mt. Norbu (5,198m)

①H.R. Shirali and Party ②H.R. Shirali 6名 ③BCをSeri (4,114m)に置いた。連日の降雪とルートがナダレにおびやかされて失敗。

④I.M-No 4

32. Unnamed Peak (5,940m)

①Himanish Hirapur, Bihar ②Kalyan Chak-raborty 8名 ③先発隊によりバラングリ氷河末端4,080mにBC、C1 (4,800m、9月27日) C2 (5,600m)と設けたが悪天候により6,110m地点で退却し、ABCにもどり氷河右岸の5,940m峰に転進した。(注、主目標がどの山であったか記されていない)

10月3日、5人の隊員(リーダーを含む)により新たにC1を4,400mにセット、翌日好天の中登頂に成功した。④I.M-No 6

33. Friendship Peak (5,229m)

①ボーイスカウト第6中央分隊(ボンベイ) ②P.B. Prabli ③11~13才の少年たちが最初に越えた5,181m以上の遠征。

BCをBakra Thatchに5月20日に設け、Beas Kundまで歩き、ABCを4,876mにセット。

軟深雪に悩まされたが、頂上の約100m下まで到達した。④I.M-No 5

34. Shigrila (6,247m)

①Giri Doot Mountai Lovers and Mountaineers Association, Chandernogore ②Miss Ban-ni Bose 7名(男子1) ③バラングリ氷河末端にBC。C1 (4,419m)、C2 (4,724m)、C3 (4,876m)と進め支氷河に入りC4 (5,486m)を設けた。ルートは支氷河の両側に見出せたが、ラホール・スピティのDupty Commissionerからロータンパスが10月3日頃閉鎖との情報で6,465m

峰に転進を決定した。5,578mのファイナルキャンプからLipikaら4名がアタックした折から降雪がはじまり、6,000mで撤退した。

なお、この隊とH A J隊は現地で一緒になり交歓会を持っている。④I.M-No 5

35. Mulkira - V (5,930m)

①Pune Mountaineers (女性隊) ②Usha Bhide - Sathe 7名 ③ダルチャまでクルーからバスで入り、BCを3,962mに置いた。C1 (4,572m)、C2 (5,181m)、C3 (5,791m)、頂上からは、M4~M8まで展望できた。ルート開拓、フィックスなど困難な部分はシェルバ(2名)とHAP(4名)がサポートした。

④I.M-No 5

36. Lindu - Dingkarmo (5,620m)

①Mountaineers Yourth Ring of Calcutta

②M.K. Bandyopadhyay 18名 ③バラングリ氷河でのフィールドワークを主目的とした遠征。

このうち、クライマーのグループはChandra谷に入り、C1を氷河右岸の4,600mに設けた。

Balai BanerjeeとSagar MoypalはシェルバのPhurbとともに、氷壁とクレバスを突破してLindu-II (5,620m)に登頂した。(10月4日)

④I.M-No 5

37. Gokinchau (5,151m)

①The Climbers Group, Srampur (西ベンガル)

②Swapan Sikdar 5名 ③BCをベアス・クンドにおいた。11月6日、S. BanerjeeとR. Ritが登頂、下降ルートは2人のHAPが開いた。

帰路、ShitidharとLadakhi Peakを試登したが、降雪のため断念。当初の目標は、Manali (5,669m)、Hanumantibba (5,928m)及び前記試登の2ピークであった。④I.M-No 5

38. Unnamed Peak (6,464m)

①Tushar Manab, Dhanbad (ビハール州)

②A.K. Sen 6名 ③はじめ、Snow Dome (6,248m)をめざし、C2 (5,486m)からアタックしたが雪と岩まじりの壁に阻まれた。その右にルートを取り、C3 (6,126m)を設けて北稜の頭に出ようとしたがこれも失敗した。

転進して5,638mに新たなキャンプを設け、Dr. Desapriy Royら3名が9月5日、6,464m峰の

登頂に成功した。初登である。④ I.M-No 4

39. Deo Tibba (6,001m)

① The Thane Mountaineers and Trekkers

② S.S.Dighe ③ 9月、不成功。詳細不明

④ I.M-No 6

40. Kugti Pass など

① Howrah Distt. Mountaineers and Trekkers Association ② Mrinmay Mitra

③ Kugti Pass (5,145m) と Mani Mahesh (4,169m) に登った。10月 ④ I.M-No 6

41. Saraunga Pass

① Himalayan Association, Calcutta ② Ujja-wal Ganguly 4名 ③ トレッキング、10月、詳細不明。④ I.M-No 6

42. Sona 氷河

① Council of Himalayan Exploration and Reserch, Calcutta ② Tridip Kumar Bosu

③ 10月、詳細不明。④ I.M-No 6

43. Unnamed Peak (5,809m)、Unnamed Peak (6,243m)、Papsura (6,451m)

① Mountaineers Club, Calcutta

② Prabht Kumar Ganguli ③ 9月～10月、詳細不明。④ I.M-No 6

44. Triund Trekking Expedition

① Climbers and Explorers Club, New Delhi と Gujarat Challengers の Joint Exp.

② —— ③ 第19回 Antar-Bharati National Himalayan Study and Trekking Programme。125名の子供と若者が参加し、Kareri (1,859m) から Kareri Lake (3,048m) を往復した。

45. Kedar

① Pune Mountaineers ② V.G.Deodhar

③ Kedar (3,582m) のトレッキング ④ I.M-No 6

Kashmir Himalaya

46. Haramukh

① Rocks & Snow, Calcutta ② Sambu Nath Das 5名 ③ BC をガンガバル湖付近(3,572m) に置いた。北峰とガンガバル・ピークとの間に良いルートを見つけようとしたが、両峰のコルに達

しただけで撤退した。④ I.M-No 4

47. Nun (7,135m)

① Trekkers and Climbers of Calcutta

② Nirpada Mullick 8名 ③ 6月29日、S. Mitra ら3名とダージリンシェルバ2名が登頂した。④ I.M-No 4

48. Stock Kangri (6,150m)、Gulap Kangri (5,900m)

① The J and K Mountaineering & Hiking Club ② Aslam Laigoor 6名 ③ Leh から24マイル歩き、Gurap Kangri の麓にBCをおき2パーティに分れて行動した。

Faraz ら3人のパーティは Stock Kangri 方面にABC (5,300m、氷河末端) を出した。当初試登した北稜は氷の状態が悪く北東稜に転進、西壁を経て Stock Kangri に登頂した。壁はもろく、70度を越える部分があった。

他の3人は、BCの西のリッジから北側にまわり込み、3級のクライムの岩場、氷壁などを越えて上部雪原に出た。ここから頂上までは容易であった。④ I.M-No 5

49. Saser Kangri (7,672m)

① Infantry Division Indian Army

② Col. Jagjit Singh ③ 初登のインド隊もレーからBCまで600kmを歩いているが今回のインド隊も同じルートをとった。BC (4,572m)、C1 (5,029m)、C2 (5,425m)、C3 (6,370m)、C4 (6,645m)、C5 (7,254m、南稜)。フィックスロープはC3以上で3～4km使用した。

第1次登頂は、Maj. Prem Chand, Capt. R.C. Patial, Hav. N.D. Sherpa, Sepoy Dhandup Chhering で、5月22日11時30分に頂上に達した。

第2次登頂は5月24日10時30分、Maj. S.P. Sharma ら9名によってなされた。いづれも酸素は使用していない。④ I.M-No 4

50. Nubra 谷

① Romesh Bhattacharji and Party

② Romesh Bhattacharji ③ Chushul と Nubra Valley に入っためずらしい記録。6,248mの無名峰に登頂した。10月 ④ I.M-No 6

次号につづく

ザンスカール山群中央部踏査報告

HAJザンスカール山群踏査隊編

ザンスカール（ザスカール）は、ヒマラヤの中でも玄人向きのエリアである。名の知れた高峰も長大な氷河もない。5,000 mから6,000 mの風化の進んだ山々が連なり、点在する小さな村落をたずねるには幾つもの峠を越えなければならない。この地域に向う人達は、旅行エージェントにバックされたネパールなどのトレッカーとは旅の発想の時点から異なっている。また、そうでなければこの厳しい土地にたちうちできないのである。

そんなザンスカールに魅せられて幾度も足を運んでいる人達がHAJの中にいることはうれしいことである。石川真知子さん、中垣淑子さんらを中心とする女性グループである。

私にとって、ザンスカールという言葉のひびきは次々と連鎖的な夢を誘う。

ザンスカール、アクサイチン、ヌブラ河流域、デオサイブレイン、ドルポ、ムスタン……、グレートヒマラヤの北側にベルト状に連なるこれらの地域は、中央アジアの砂漠や草原、シルクロードとは異なる感動をもって迫ってくる。ヒマラヤの奥の院とでもいおうか。

これらの地域の情報は切れ切れであり、体系化されていない。ザンスカールも例にもれない。地名・東西交易・踏査史など、報告書中の「ザンスカール概観」にはずいぶんと教えられた。以前に「ラダック踏査年譜」を作った折、ザンスカールが気になってしかたがなかったのでよけいに感じられたものである。

地域区分上のザンスカールと、地理上のザンスカール（グレートヒマラヤ、レッサーヒマラヤ等と対比しての）とは混同され易い。ガルワール・ヒマラヤの高峰カメット（7,756m）も地理上のザンスカール（山脈）に属する。地域区分上のザンスカールはJanmu & Kashmir州の一地方、ラダックの一地域である。踏査史を編むにあたって留意しなければならない。

「青いけしのこと」という項がある。一輪の青いけしを見たという。ヒマラヤで青いけしを見た人は幸運であると思う。乾燥気味の地域では青いけしは孤高の趣がある。ナンダ・デヴィ内院に咲いていたのもただ一株であった。

スケッチが多く、全行程に詳しいイラストマップがついている。1日4回もの気象観測の記録も貴重である。物価・賃金・疾病調査など、すべての事象に調査の目が注がれている。メモが苦手なテープレコーダーに日誌を吹きこむような不精者の私など只々感嘆させられるだけである。フィールドワークのノートを見る思いがする。

中垣さんの苦心作「Zaskar Mt.s 1:250,000」が付録についているのはありがたい。

各種の地図を集成し、これを足で調べた結果でもって訂している。

レーは急速な観光化の波に洗われているらしい。成田山のパンフレットがレーのゴンパにおいてあったというが、いったいどんな意味をもっているのだろうか。

B5判、116ページ、写真8ページだが中味は重い。（い）

1981.1発行、深山桃子編集、HAJザンスカール山群踏査隊（発行者）

頒価：送料とも2,000円

または、日本ヒマラヤ協会事務局

※関連として1975年8月の記録は下記のとおりである。

ザンスカール山群ピズドン・ラの記録

1978年2月15日発行 B5判 54ページ（問合せは中垣さんへ）

※56年度HAJ総会終了後、中垣淑子さんを講師として踏査報告会を開催します。くわしくは表紙のウラの総会通知をごらんください。



花を求めて (9)

水野 勉

ブルジェワルスキーが死亡するずっと以前に、ロシア政府は別に遠征隊をくり出していた。それは1874年に中国に派遣されたソスノフスキー大尉率いる遠征隊で、その目的は中国北西部地域を通過し、ゴビ砂漠および天山を越える新しい交易ルートを発見することであった。興味あることに、この遠征隊は正式な写真家を含めた最初の中国における遠征隊であった。かれらは甘粛の花々の豊かな美しい地方を通ったが、植物の蒐集品はじつに少なかった。

ロシア人旅行家のうちでもっとも興味ある人はグリゴリ・ニコライヴィッチ・ポターニンである。かれの父はキルギス草原近くに住んでいたシベリヤ・コサックであった。G.N.ポターニンは1835年に生れ、シベリヤのオムスクにある軍官学校に学んだ。そこにいるときに、有名な探検家で、後に帝国地理学協会の副会長になったセミノフと知り合った。ポターニンは学問研究をつづけたいと切望したが、ペテルスブルグまで行く資金がなかった。幸いなことに、1858年、トムスクからペテルスブルグへ旅する政府のキャラバンについていくことを許され、ペテルスブルグへ行くことができた。そこで、セミノフとの友情が幸いして、大学へ入ることができた。しかし、反政府運動に関わり、シベリヤに戻らねばならなかった。シベリヤではふたたび学問どころのさわぎではなく、苦役に従事した。要塞にしばらくいた後、囚人植民者としてニコルスクへ送られた。1874年に、セミノフの運動のおかげで自由の身となった。1876年には中央および東部アジアへの旅行をはじめた。かくして、それから何回か遠征をおこなったが、いつも妻が一緒だった。

かれの第1回と第2回の旅行はここでのテーマ

には無関係である。モンゴルにのみ関わっていたからである。しかし、第3回と第4回の旅行はたいへん重要である。第3回旅行は1884年5月に北京から出発した。ベレツォフスキー（第1回と第2回に同行した）とスカシィとが同行し、遠征隊はまずオルドスを探査し、それから蘭州をとってはるか南、アムド地方へ向った。このアムドというのはココノールの東の地域にタングード族がつけた名であり、西寧や南西甘粛あたりの広大な地域を指している。この地方の地域名は非常にいいかげんに付けられていて、まぎらわしい。このアムドは、J.F.ロックが1924年から1926年にかけて探査し、かれがテブ・ランドと呼んだ地域とほぼ同じである。

遠征隊はその基地をシク附近、正確に言えば、30年後にファーラーやバードンらと同じ場所に設けた。かれらはサタニ山脈を探査し、チャゴ村に滞在した。そこからふたたび四川との境を越えて南へ移動し、黒河という川の水源地を探査しようとした。結局は、北西四川の松潘に向い、ギル大尉と同じルートをたどった。そこから、もっと東寄りのルートをたどって蘭州へ戻った。

その間、ベレツォフスキーはシク附近に夏いっぱい滞在して、動植物の採集をおこなった。かれはこの地に更にもう一年間滞在した。ポターニンとスカシィはココノールおよびモンゴルの砂漠を経由してシベリヤへ帰った。この後ポターニンは数年間帝国地理学協会の東部シベリヤ支部の理事をつとめた。

第4回遠征はもっと南まで進んだ。ベレツォフスキーは今度もポターニンと同行し、そのほかカシュカロフは博物学助手として、オブルチュフは地質学者として同行した。北京から秦嶺山脈を越

え、陝西をとって四川の首都成都へと下った。そこで、1年ばかり早くから来ていたベレツォフスキーと合流した。

ベレツォフスキーはふたたび自分だけの道を進み、残りの隊員は峨眉山をとって打箭炉へ行った。そこからカシュカロフは巴塘へ行った。打箭炉に3か月を過した後、ポターニンたちは揚子江の方へ出発した。ポターニン夫人が病気になったためである。夫人は重慶に到着する2日前に病死した。

この旅行はいままで非常に軽く取り扱われて来た。後の探検家たちがはるかに徹底的にこの地域で採集したからであろう。しかし、ポターニンは非常に多くの種と標本を採集したのである。第3回旅行では400種の12,000標本、第4回では1,000種の10,000標本を採集した。しかし、ポターニンの採集品を整理していた偉大な植物学者マキシモヴィッツが1891年に亡くなってしまい、ポターニンの仕事の大部分がいまなお未発表のままである。かれはたしかにりっぱな旅行者であり、すぐれた採集者であった。かれが峨眉山や打箭炉を訪れたのは、4月から5月にかけて、せいぜい7月までだったので、高山植物にとってはあまりに早くすぎたし、種子のためにもまた早すぎた。そうでなければ、ポターニンは後になってウィルソンその他によって紹介された多くの植物や花々を採集したにちがいない。ベレツォフスキーの紹介したランの一種 *Arundinaria nitida* (南西甘粛) はたぶん中国から輸入された最良の植物の一つであろう。

同時期にはロシア人探検家の数多くの名前が見出される。たとえば、グルム・グルジマイロ兄弟などがあるが、植物学的成果として重要なものではない。

結局、中国の植物学における偉大な名前、エミル・ブレッチュナイダーをあげることになるだろう。かれは中国植物研究史家と有名である。1900年以前の中国における植物探検に関する知識と中国植物分類学の知識については、かれに比敵するものはないであろう。ブレッチュナイダーはその方面での最高峰といえるであろう。History of European batanical discoveries in China, 2

vols (1898) はその見事な成果である。

わずかな空隙はあったにしろ、だいたい1866年から1883年にかけて、かれは北京のロシア公使館に医者として勤務していた。植物採集者としては、かれはそれほど重要な仕事をしなかった。旅行も北京から遠くはなれることもなかった。それにかれの旅行した河北地域は植物や花に恵まれていなかったのも不運であった。しかし、かれの方法はユニークであり、ヨーロッパやアメリカの庭園において価値があると思われる花々のみをまず採集したのだった。かれは書いている——「北京付近の山地を四季を通じて訪ねるにあたって、いつも心に思ったことは、ヨーロッパに知られていない興味ある植物の十分に熟れた種子を得ることであった。わたしはそれらをヨーロッパや北米にある植物園のいくつかに送ったが、それらの植物の多くが現在よく育成している」

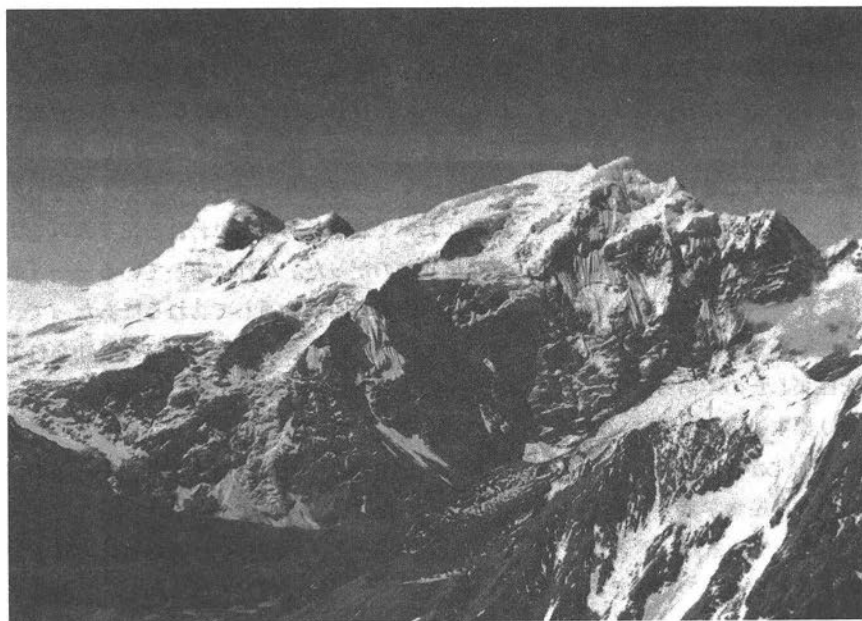
ブレッチュナイダーは北京付近の植物の貧弱さについて嘆いているけれども、それでも、数多くの花々をヨーロッパに紹介したのだった。

以上9回にわたって、「花を求めて」と題して書いてきたが、じつはこれまでが序論であって、この後が本論なのである。ウィルソン、フォレスト、ファーラー、キングドン・ウォードなどの本格的な植物採集者が活躍したのは、これ以後なのである。これらのすぐれた人びとを除いて、中国の南西部における植物採集や花々の発見の話は成立しないのである。

わたしとしては、成り行き上、この話をしばらくつづけていくつもりであるけれども、一つのテーマがあまり長くつづいては読者は飽きるかもしれない。そういう理由もあるが、他の一面では、わたし自身、時機に際して書いておきたいことも出てくるので、そういうときは中断して他の話をすることにしよう。中断ということは、話の面白さがうすらぐ効果もあるけれども、毎日のことではなく、月にいっぺんの話であるから、そのへんのところはかんべんして頂きたいと思う。

交替しておもしろい話を提供していただいた五百沢氏がおりられたので、その穴埋めに努力するつもりである。更に御協力を願う次第である。

山



北側から見たメラ・ピーク

6461 m

メラ・ピーク

藤原 一孝

はじめに

クーンブの南東に位置するメラ・ピークはトレッキング許可証で登れる山としては、マナン地区のチュルー西峰(6,630m)に継ぐ二番目に高い山として知られています。このチュルー西峰が魅力ある最高峰であるのにもかかわらず、その地理的障壁からアプローチに日数がかかるのに比べ、メラ・ピークは他のトレッキング許可峰と同様に多くの登山者に親しまれています。初登頂は開禁前に何パーティかが無許可で登頂している為、正確な記録は残っていませんが、国内では1979年5月の東京雪稜会、長谷川啓明隊長他4名の記録が同年の「山と仲間」9月号に掲載されました。

このメラ・ピークの良さを掲げるとすればまず第一にアプローチが他の地域のように混み合うような事はなく、その理由としてザルワラ(約4,700m)

とザトル・テン(4,943m)の二つの急峻な雪の峠によってエベレスト街道とは隔絶した世界を生み出している点とクスンカングルや未登のピーク43等に代表される岩峰群の圧巻にあると思います。

又頂上氷河からは、クーンブ地方の山並みや東方にはマカルー南西壁の赤茶気た大岩壁、手前のチャムランの純白の山客が印象的です。

アプローチ

カトマンズより双発のツインウォーター機で約40分のフライトでクーンブの玄関クラ飛行場へ。現地の手配が済んでいる場合はこの日の内にキャラバン開始。エベレストに源頭をなすドート・コシの流れに背を向けヒンクー谷への第一の難関ザトル・ワラへの登りは急登が約1,800m続くことや、その峠が5,000m近いことと日本から短い日程で渡航する為コンディションが万全でないこと

もあって、ゆっくり慎重に登ります。この登りで初めて富士山より高い高度を体験する人もいるはずですが、2日目の夜を水のない未だ慣れ切っていない高度で過ごすことを考えると3日目に峠を越えてヒンクー谷の谷底まで下りの方が理想でしょう。

このヒンクー谷へは南北二つの峠がありますが距離的には近道になる北側のザトル・テンは雪が深い為殆ど利用されておらず、たとえ装備の良い我々が通過できてもポーター達が嫌がります。低い方のザトル・ワラでさえ常に雪をまとい、場合によってはポーターにピッケルを貸して上げたり登山自体を中止にしたこともありました。2日目はこのザトル・ワラの手前、森林限界を過ぎたあたりの僅かな台地に幕営しますが、この高度(約4,000m)では殆どの人が何らかの形で高度障害を訴えます。3日目のザトル・ワラ越えですが峠は2つ程あり、ちょうど奥又から前穂に向かう途中の踏み替え点のような感じでその最初の峠を乗越すと早朝の冷たい空気から開放され暖かい陽光の中初めて展開するヒマラヤ的景観に頭痛も吹っ飛ぶことでしょう。

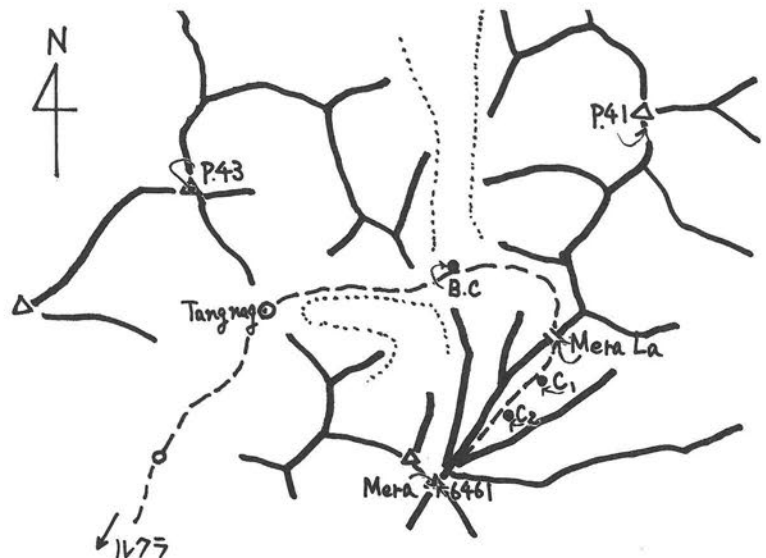
峠からはカルスト台地のように岩が露出した草原を今度は一気に1,000mヒンクー谷目指して下り続けます。最初は急斜面についた長いトラバース道を巡りますが、やがて急な涸れ沢の下りとな

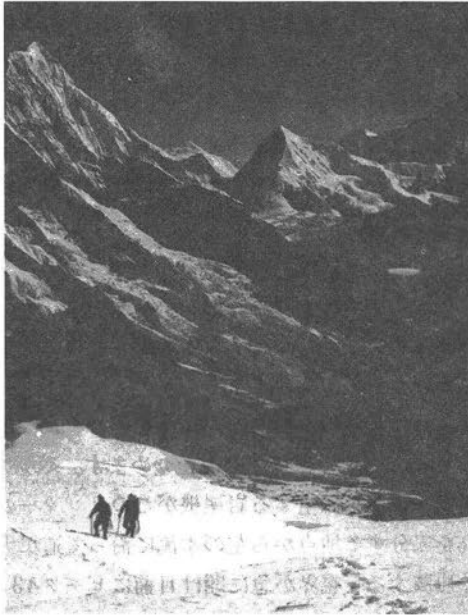
り沢音が聞こえてきたらタシンディンマの岩小屋です。ここでも充分泊まりますが、さらに30~40分の下りでヒンクー谷(3,550m)まで行った方が高度の影響は少ないでしょう。いづれにせよこの日は早朝出発して昼食も予めシェルバにチャパティーかパンケーキそしてテルモスに紅茶でも入れてもらって簡単に済ませるようにします。ヨーロッパ・アルプスにはムーアのCOLというのがありますが、下山の時や万が一何かあった場合、再びこの峠を越えなければならないと思うと将に地獄の門という気がしてきます。

4日目は日本の沢沿いのコースを思わせるようなヒンクー谷右岸の森林帯の中をつめます。やがてメラピークから派生する岩尾根がこのヒンクーの流れを二分する地点から左の本流に沿って道が大きく屈曲すると視界が急に開け目前にピーク43、クソンカングルの東峰・西峰が白く巨大なギザの三つのピラミッドのように飛び込んできます。

開けた草原の中のカルカを過ぎたなら対岸メラピーク側に流れを渡って岩小屋の点在する川辺で幕営します。

翌日は半日行程でタナ(4,356m)の部落に到着します。春先4月頃から牛を放牧する為に現地人が我々が巡ったのと同じ道を牛をひき連れて来ていますが、秋から冬にかけては、どのカルカもガランドウで時たま訪れるトレッカーや我々のような登山者だけの世界となります。このタナの名物





メラ・ラから頂上に向う
(東京雪校会提供)

は何と言ってもジャガイモ、深い貯蔵用の堅穴から取り出して煮たものを一度でも食べたものは必ずタナに戻ってくるという言い伝えが昔からあるとかないとか。時間があればピーク43の東壁が落ち込んでいる氷河湖サバイ湖に登ってみるのも良いでしょう。

ルクラを出発して6日目、ついにカーレ(4,800m)にBCを設営します。幕営地のすぐそばの尾根に登ると真正面にメラピークの北面のズタズタに裂けたセラック帯が迫り今までひたすら顔を隠し続けていたその白い頂が可愛らしい乳首のように顔を覗かせています。

登山活動

BCからはまずメラ・ラ(5,415m)峠を目指します。サイド・モレーンの中の急登を終えるとメラ氷河の舌端が表われてきます。最初は部分は傾斜もきつく場合によってはアイゼンを着用した方が良いでしょう。クレバスを縫うように登り切ると緩やかな雪原に出ます。左側の岩稜に平行して進むとメラ・ラに着きC1を設営します。風の通り道ですので設営地はコルから少し離れた岩影がベストです。

このメラ・ラまではめったに人は訪れませんが一

応トレッキング・コースでこのまま東に向かうとマカルー街道と合流します。

メラ・ラからは次第に幅を増せ緩やかな雪原に登り5,900m～6,000m付近に最終キャンプを置きます。目標物が殆どない為形容の仕方ありませんが、メラ氷河に沿ってメラ・ラから続いている岩稜の上端あたりです。

それぞれBC～C1、C1～C2の間は半日行動で体が高度に慣れてくるとBC～C2間もそれ程苦ではなくなります。このC2からのクープの山々のアーベントロートは素晴らしい1日の終わりを演出してくれます。

さていよいよC2からの頂上アタックですが、傾斜がある所でも富士山の斜面と殆ど変わりありませんし風が強い為新雪が吹き飛ばされて最適な登行が期待できます。技術的にはあくまで冬山の一般技術の実践範囲ですが、ヒドン・クレバスの通過には充分注意しなければならず国内のような間隔の狭い形だけのコンテニウスでは確保態勢に入る前に引き摺り込まれる可能性があります。当然危険だと判断したら直ぐスタカットに切り換えます。特に頂上雪原の手前の急傾斜には部分的にかなり複雑なクレバスが走っていますから頂上を目前にしても決してあせらず、じっくり弱点を見い出して登りたい所です。

このクレバス帯を抜けると顔前に頂きが表われます。見た目より実際はかなり距離があり高度と共に疲労も重なり苦しい登高となります。遠くからでも識別できますが頂上の廻りは大きなクレバスで遮断されている為、我々も含めて殆どのパーティが左側のシュルンドの突端に登頂しています。直下は約40mの急な氷雪壁になっていますからスタカットで登った方が安全です。この頂から本当のピークまで距離にすれば40mぐらい高さで20mぐらいだと思います。もし極めようとするならスライドハシゴを持参するか急な氷雪壁の手前を右に大きく廻り込んで登るしかないと思いますがいづれにせよ高度なピオレ・テクニックが必要となりそうです。

カンチェンジュンガ学術調査について

五百沢 智也

登山部門本隊は、そろそろヤルン氷河のBCに到達して本格的登山活動が始まるころだと言う。

私共の学術部門のグループも3月28日成田発のAIで先発班がカトマンズに向かった。しかし、現地からは、内務省のクレームがついて、おいそれとはBCまで入れないという情報が伝えられて来ていて、前途は楽観を許さないものがある。

ここで学術班がこれまでやりたいと考えてきた調査活動の内容と、今回の学術班第1次隊がやれそうな仕事について少しばかり解説を試みたい。

昔、深田久弥さんのお宅にうかがった折、記念帖になにかと言われて、エヴェレストのてっぺんまでレベルをかつぎあげて、その高さを精密に調べてみたいと書いたことがある。高さを測定するもっとも精密な測量法は水準儀と標尺をつかってやる直接水準測量であり、すべての水準点の高さごとく限られた2～3の三角点の高さはこの方式の測量で求められている。水準儀（レベル）という器械は、大きい半径でゆるく曲った敏感な気泡管を使って精度の高い水平方向を求め、その方向を望遠鏡で遠くまでのぞけるようにしたものである。測量は、2地点に立てた標尺（ものさし）の中間部にこの器械をすえて、前後の水平方向線がそれらの標尺のどの目盛にぶつかるかを読みとって、両地点の比高を求めるやり方で進める。

三角点の標高は、平地にある水準測量で標高を求めた三角点を基にして、角度を測量して三角法の計算で求める間接水準測量で測定したものだ。

角度の測量の誤差は距離が離れるほど大きく効いてくるので遠距離から求めたヒマラヤの高峰の標高はそれなりの誤差を持っているということになる。深田さんのところでエヴェレストにレベルをかつぎあげるということを書いた意味は、世界一の高峰なら、地球の住民として、それだけ精密な測量をやるだけの価値があると考えたからであり、山に登って終りでなく、山に登った上で仕事

をしなければ意味がないという畑で育てられた男の意地があったからでもある。

日本国内の三角点の測量は、位置が主体であり、標高は二の次なのであるが、それでも、直・友という往復の観測を現地でやっている。つまり、同じ器械でA地点からB地点を観測したあとB地点へ行ってA地点を狙って観測するわけである。もちろん両地点に測標を作ってその位置を確かめてやるのだ。それが世界一の何十人も人が登っている山なのに往復観測も実施していなければ、直接水準測量の路線が山麓まで達していないというのはおかしいのではないかといったふんがいても、この記念帖の文にこめられていたのである。

カンチェンジュンガもエヴェレストと同様であり、この際、頂上の位置を登頂者のボールにより明確にしたうえで測定し、ネパール政府の作った山麓の水準路線とBC付近の測点との間は直接水準測量で結びつけたいというのが私達学術班の目標であった。直接水準測量で精密な標高を求めておくことは、きたるべき再測によってその間の変動量がわかることとなり、世界で最も大きい隆起量を持つというヒマラヤ山脈が、推定で考えられているように年間1センチ程度の隆起を果しているものかどうか、地球物理学者、地形学者、地質学者がみな強烈な関心を持っている課題である。

水準儀の値段が一等水準測量用で180万円ていどなので、短期にBC——山麓間を結ぶにはすくなくとも2～3班の人員と器械が入用となり、今回の第1次隊は実施できそうにもない。そこで今回は日本光学からお借りした光波測距儀、セオドライト、オート・レベルを使って山頂——BC間の観測、氷河の流動調査、秋の空中写真撮影にそなえての標定点測量を実施したいと考えている。

もちろん、このほかにも、カンチ周辺の氷河台帳用の観察と記録や氷河地形、氷河周辺地形をふくめた地形分類図作成のための調査も実施したい。

追 悼

野中 和雄氏

’80年12月谷川岳東尾根に消ゆ



81年カシミール・ヒマラヤ クン(ピナクル・ピーク)の隊長に予定されていた
本会々員野中和雄氏は、80年12月20日、谷川岳東尾根に向かったまま消息を絶
った。野中氏は本会の78年ヒマラヤ登山学校の副隊長として活躍し、自らもトリ
スルⅡ峰(6,690m)の頂に立った。また、カンチェンジュンガ委員会のメンバー
として事業推進に尽力されるなど本会発展のために多大の功績を残された。

登山者としての野中氏は、ウォーカーバットレスの登攀に見られるように屈指の
クライマーとして輝やかなしい記録を残している。一面では「書斎で山の本に囲まれ
ている時が最高に楽しい」と語り、友と飲む酒をこよなく愛し、家庭では一児の父
としてあきれほどの子ぼんのうでもあった。

消息を絶ってからはや3ヶ月余が過ぎさり、再びその童顔に相まみえることはな
かろう。ここに追悼の言葉をささげてご冥福を祈るものである……合掌。

野中君と私の関わり

稲田 定重

人にはそれぞれにどうすることもできないさだ
めがあるのだろうか。

私と野中君との出会いは76年5月、仙台での
Expedition研究会集会から始まる。当時、カン
チェンジュンガ縦走計画の是非をめぐる激しい
議論が行われていたが、彼の戦列への参加を要請
したのは私であった。

以後、彼はひんぱんに会合に顔を出すようにな
り、技術部門の重要スタッフとしての責任を担う

にいたる。けれどいつの会議にも寡黙であった。
いったい何を考えていたのだろうか。

私が野中君をヒマラヤ登山学校の副隊長として
トリスルに誘ったのは77年秋であった。「行って
もいいです」と、いつもながらのボソッとした口
調での返事だった。けれど、それからの彼の動き
はめざましかった。

20余名の隊員の中核となって定期的な集会を催
し、自宅に招き、或いは東京に出ては隊員を相手
によく飲んだ。隊員の胸に飛びこむような彼独自
のチームづくりは泥臭いけれど着実であった。

そんなある日、カンチ計画を進める中で彼はメ
ンバーの一人からひどく心を傷つけられる言葉に

接した。まもなく彼はカンチの戦列から身をひいた。後日、ボツリともらしたことがある。「オレはああいうのは性に合わないんです。山は楽しくなくちゃだめですよ」

登山学校副隊長としてのインドでの日々は彼にとって楽しくもあり、一方では苦渋に満ちた時でもあったようだ。英語は全くの苦手であったけれどリエゾン・オフィサーと最も永く語り、胸のうちに開き親密になったのは野中君であった。よく柔道で彼を投げとばしていたものだ。不思議な魅力にあふれた人間であったと思う。

彼は人も知る類まれな登攀者であった。主峰アタックのリーダーに最もふさわしかったが、敢えてお願いしたⅡ峰へのサポート役を快く引受けてくれた。81年クン(ピナクル・ピーク)に駆け立てた動機の中にこの時の満たされない思いが大きな比重を占めていたことは疑いもないことである。

彼が消息を絶った12月21日はインドからS.クマールが来て81年遠征の打合わせをする予定であった。私も同席するわけであったがクマールの来日が延び、彼は遠征のトレーニングのため隊員とともに谷川岳に向かったのである。

カンチからトリスル、そしてクン、谷川岳と見えない一本の運命の糸が張られ、その糸が張られる過程に私自身もずいぶんと関わってきたように思えてならないのである。

奥様からの手紙には、残された幼な子にやがて信念に生きた父の生涯を誇りをもって語り聞かせたいとあった。

思えば78年トリスル隊は亀井君に続いてまたもすばらしい人間を失ってしまった。

今年のマチガ沢の雪はいつになく多いという。今はせめて、深く冷たい雪の中から1日も早く家族のもとに帰られることを祈るのみである。

思い出の中の野中さん

安中 秀子

「俺、あんたに会ったことあるよ」——、知っている人がいるなんて、思いもしなかったH A J登山学校の初めての集会で、言葉をかけられた。くせのある栃木弁で、やさしそうな表情の人だっ

た。とぼけながら、2・3話をしているうちに、足利にいる私の友達がよく言っていた、先輩の野中さんだということがわかってきた。

あの日からもう3年以上が過ぎた。人なつっこい私の性格か、野中さんの面倒みのよさか、その時から、おりにふれ何やかやと、面倒をみてもらうことの多い日々だった。

頭の中がむしゃくしゃしてくると、よく野中さんちへ電話をかけた。ぶつぶつとりとめもなくしゃべる私のおしゃべりを、黙って最後まで聞いてから、「そうかや?」と、ボツンと言うだけの事が多かったが、早朝でも夜遅くでも、いつでも気持ちよく対応してくれた。

昨年 of インド登山の際も、いつものように甘えては、助けをかりでばかりいた。谷川岳幽ノ沢でのフィックスの訓練、スノーバーの調達、バラで購入した米の袋詰、梱包作業等々。今思えば、栃の葉国体で忙しい最中の身だったのに、自分の登山のことしか頭にない私にせがまれて、どんなに迷惑だったことか。

インドから帰った翌日、「広島の知合いが来ているから来ないか?」という電話をもらい、いそいそと一升瓶なんぞ抱えて、栃木まで酒飲みに行った私。「良かったな。どんな山でも登れなきゃだめだもん」と言って、野中さんは私達の登頂を喜んでくれた。

1980年12月24日、谷川岳東尾根での野中さん達の遭難が報道された。それ以後、私はテレビとラジオにビリビリしながら過していた。そして26日、野中さん達の捜索は打切られた。もう帰って来ない。世話になりっぱなしで終ってしまった。野中さんが生きるか死ぬかの時ですら、私は気をもむ以外何もできなかった。

かつて野中さんが、心を傾けて過したという谷川岳幽ノ沢の話、今年行くはずだったヌンの事、木曽御岳でもやしの栽培の話をしてくれた事、みんなどこかへ行ってしまった。——さようなら、やさしかった栃木のお兄ちゃん。春になったら、皆と一緒に迎えに行きたいと思います。

1981.3.10

帰らぬ“友”を思う

館野秀夫

「山の本にうずまり、山を語り、グラスを傾ける時が最高に幸せだ。そんな環境・仲間を作り夢を育てていきたい」彼の残したこの言葉を今は空しく思い出す。

あの夜(12/20)小島守夫氏より「野中達8人が谷川岳よりまだ帰ってこない」との電話を受け野中がリーダーだから心配はないよとその時は軽く考えていたが、8人という多人数でルートが東尾根というのが何かひっかかるものがあった。ともかく仲間に一応連絡だけはし、待機している所へ22日に先行した2人だけが下山し、23日に肩ノ小屋に入った救助隊より残る6人の絶望的ともいえる連絡を聞いて、事の大きさに仕事も手につかず、現地に行ってもムダとは知りながら自分を納得させるためにも小島氏と二人25日に土合へと向った。

結局何もしてあげられなかった。24、25と続いた荒天が26日になってやっと晴れ、最後の望みを託したヘリも空しくひきあげ、水上の本部より天神尾根を下山してくる捜索隊のトレールをうつろな気持で見上げるだけだった。

彼をHAJに誘ったのは私と小島氏である。76年に宇都宮で東日本ヒマ研を開いた時だった。彼とは年が同じということもあり、以前より一緒にザイルを結んだことはなかったが、山を語り、グラスを傾けるには最高の友だった。共に逝った速水氏もHAJの会員であり、プニ・ゾム、マッキンレーの経験を持ち、野中の片腕として今夏のカシミールでは活躍するはずだった。

彼らの技量からすればいくらかでもヒマラヤへの機会はあったろうに、彼は共に登る仲間を自ら育てる事にヒマラヤを指向するひとつの楽しみを求めていた。彼は私などとは違い、自ら定めた目標へ向ってあらゆる努力を傾けるタイプであった。78年トリスルも、今夏行くはずだったカシミールのクンも来るべき8,000m峰へのステップとしてとらえていた。

彼が育つつあった彼の仲間ともども谷川岳の雪にうもれてしまった彼の夢を、これからどう掘り起していったらいいのだろうか。

野中和雄氏主要山歴 (順不動)

国内

冬期 谷川岳幽ノ沢右俣リンネ

“ “ 左俣3ルンゼ

“ “ V字右ルート

“ “ 右俣リンネ右稜

剣岳小窓尾根、鹿島槍荒沢奥壁、越後三山縦走、衝立岩第2雲稜ルート、穂高岳屏風岩雲稜ルート、同東壁

夏期 谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジドームカモンカルート

国外

ピッツパディレ北壁、ドリユ北壁、グランドジョラスウォーカー稜、グランシャルモ北壁、マッキンレーウェストバットレス、トリスルII峰

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)各地の社会情勢、現地事情(入山事情)、登山隊の動勢など。

紀行 遠征、旅、トレッキング……ヒマラヤとそれを取り囲む地域のものであれば、何でも結構です。採用分には粗品を進呈致します。

日本からヒマラヤから ヒマラヤからの便り、ヒマラヤについて日頃思っていること、HAJや編集部に対する提言などもお寄せ下さい。

◎送り先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1-506 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

事務局日誌 (3月)

- 4(水) 事務局打合せ(稲田、山森(美)、緑川)
10(火) 今日から細貝が事務局に勤務
12(木) 事務局打合せ(稲田他)
14(土) 「ヒマラヤ」№113発刊・発送
山森(美)が今日から産休
19(木) カンチ学術隊打合せ(五百沢ほか)
20(金) カンチ通信第1報届く
25(水) H A J 東京定例集会(ルームにて)
ヒマラヤ放談インタビュー(近藤和美氏)
26(木) カンチ通信第2報届く
27(金) カンチ学術隊の出発準備で多忙な1日となる。夜、先発班の壮行会開かれる(ルームにて)。
28(土) カンチ学術隊先発班出発。(小林、谷本の2名)
29(日) 日本ヒマラヤ会議が水戸で開催される。

寸 感

▶ カンチのキャラバンも順調との朗報、学術隊も先発班が出発。いよいよカンチの山場を迎える緊張感がH A J事務局にも漂いはじめました。留守事務局もしっかり守らねば、と心を引きしめて奮闘しています。

▶ 山森(美)休職の後、ことあるごとに慣れぬ2人で鳩首会議。1日いちどは稲田専務理事に問合せ。もっとがんばらなくちゃ。(緑川)

ヒマラヤ№114 (5月号)

昭和56年3月10日印刷 56年5月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 緑川 恭子

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1

淀橋食糧ビル 506号



UNITED TRAVEL SERVICE(P)Ltd.

■インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語でひきうけています。本社にも東京事務所にも日本語に堪能なスタッフが多数おります。

■許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレン

ジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。もちろん日本語で!!

東京事務所 〒141 東京都品川区西五反田 2-23-11-202 電話 03-493-4920

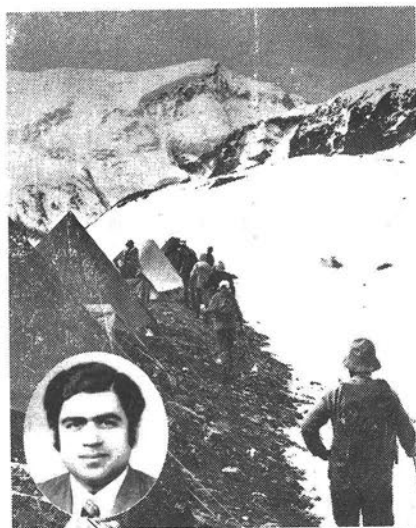
本社(デリー) 802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India
Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable: YOKOSO

Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



全世界のネットワーク

AFIA ホーム 保険会社

海外 山岳 保険

取扱代理店

郷インシュランス・コンサルタント

〔ホーム保険会社代理店〕

〒100 千代田区丸ノ内3-1-11

国際ビル8F

TEL. 03-281-2981

相談所

ホーム保険会社首都圏支店

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-211-4401

担当：寄木康男

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル ☎03(200)7219

田淵行男、雪形遍歴50年



「武田菱」
北アルプス五龍岳

残雪が描く山の芸術「雪形」の豪華山岳写真集

山の紋章 / 雪形 田淵行男

くゆきがた

日本アルプスから、東北、北海道まで
山麓に春を告げる
雪形約130体、ここに集う。

■名著『日本アルプスの蝶』につぐ不朽の書

へ高山蝶が日本の山を飾る宝玉とすれば、早春の山に浮かぶ雪形はかけがえない民族の伝承である。雄大なカメラワークと誌情溢れる名文で綴った山行50年の総決算。

■初めて集大成された雪形写真約300点

安曇野、四ヶ庄平などから望みされる信濃の雪形約50体を中心に、新潟、富山、山梨、群馬、岐阜などの隣接県、さらに東北、北海道まで取材し、可能な限り収録した貴重な写真集。後世に残る民俗資料としての価値も高い。

■自然愛好家待望の雪形ガイドブック

旅行者や登山家の雪形探索に役だつイラストやスケッチ、連続写真、地図なども多用。雪形の魅力を十分に味わえる1冊である。

【内容構成】

第一章 ■雪形の季節

第二章 ■信濃雪形抄(1)安曇野の空に

第三章 ■信濃雪形抄(2)伊那・木曽ほか

第四章 ■雪形ニユーフェース

第五章 ■他県雪形点描

第六章 ■雪形補遺

●造本・体裁

●A4変型判(290×220ミリ)／布クロス装幀押し／
ケース入り・総頁322頁(4色108頁、1色52頁、解説152頁、その他10
頁)●収録写真カラー115点、モノクロ93点

6月新発売

定価 118,000円